

動物の肉を喰う〈わたし〉 ——内澤句子『飼い喰い』における動物と人間の関係——

内藤 あゆき

はじめに

食料品売り場の広いスーパーに行くと、陳列されているソイ（大豆）ミートを見かけることが数年前よりも珍しくなくなった。私がよく利用するスーパーでは乾物コーナーに三、四種類ほどのソイミートが並ぶ。ちょうどそのときは、日々の食卓からどれだけ動物性の食品を減らせるのか試していたので、そのなかでもっとも安く、食べやすいと思われたミンチ状のソイミートを買ってみた。すぐには調理せずしばらく保管していたが、その後、冷蔵庫にあるものだけで食事を作らなければならなくなったとき、ソイミートを使って麻婆豆腐を作ったのだった。ソイミート、豆腐、豆板醤といった、原材料のほとんどが大豆である出来上がった料理を食べて、いったい私は何を食べているのだろうかと奇妙な心地になった。

肉を模しているからには、ソイミートが料理のなかで占める位置は肉の代替品という立場である。ソイミートという名称からもうかがえるように、この食品には明確に肉食への志向が見られる。肉ではない、大豆だというところに、かえって肉食への執着を感じる。しかしいくら食感や形状を模したところで、まったくの別物であることは間違いない。余りものを具材にカレーを作るなどといったあり合わせの料理とは異なり、大げさに言えばソイミートを用いた料理は変質してしまう。代替品を用いることで穴を補えたかのように錯覚するかもしれないが、実際のところまったく別の何かにまるごと変わってしまったはずなのだ。肉の代替食品の選択肢が豊富になりつつあることは、肉食にたいする関心の高まりの裏返しでもある。

食肉を提供する工場式畜産は、二酸化炭素やメタンガスの大量排出、水質汚染といった、環境保全の点から見ても多くの問題を抱えている上、集中的に大量の家畜を産み育てることから感染症のリスクも高まる。それらは人間の食の安全を脅かすと同時に、家畜にとっての脅威である。家畜の苦痛を度外視した飼育／肥育、屠畜にたいして、すでに動物の権利・福祉の観点から批判がなされてきた。

功利主義の立場をとるピーター・シンガー『動物の解放』はなかでも著名であり、動物が感覚を有することを重視し、苦痛の軽減を主張する。近年では、動物の権利運動の伝統のある欧米のみならず、日本でも動物倫理の議論は盛んになりつつあり、よりいっそう人間中心主義の見直しと脱搾取が唱えられている。井上太一の『動物倫理の最前線』では、そうしたこれまでの動物倫理に関わる理論が網羅的に論じられている。また同著者による『今日からはじめるビーガン生活』は、ビーガンになったときにぶつかる生活の中の疑問に実践的に答えるものとなっている。本書で著者は、動物性食品を植物性食品に置き換えることを軸にビーガン料理を紹介する。著者は「ビーガニズムは禁欲の修行ではなく動物搾取を避ける生き方なので、動物性の料理に模した代替食品を食べることに罪悪感を覚える必要」はないと述べる¹。しかし先述したような肉食への欲望を隠しもしないソイミートを食べることは、人間中心主義や動物搾取を克服したと言えるのだろうか。何が変わったというのだろうか。

何を、どのように、どうして食べるのかということは個人的なことだ。とはいえ、食べることにたいしてはさまざまな介入がなされる。たとえば治療等の理由から医師から食事に制限を設けられている場合もあるだろう。近年は糖質制限ダイエットが流行り、たんぱく質の摂取が過剰なまでに勧められる。何かを食べたいと思っても、それを食べることを他人からどう見られるかを気にして口にできないこともある。〈わたし〉がそれを食べることを選んでいるように見えて、実はその選択は〈わたし〉以外の要因に大きく左右されている。

しかし、だからこそなのか、食べることや食べものについて他人から指摘を受けた際にはそれがどんなに些細なものであっても、反射的に拒否感を覚える。たとえ善意の忠告や、科学的根拠に基づく正しい判断、マナーであったとしても、〈わたし〉が取り結んでいるこの食べものとの関係が踏み荒らされるような不快感がある。だが一方で、私たちは今、食べものとの関係をどれだけ築くことができているだろうか。関係を取り結ぶ前に家畜の肉を食べてしまっている場合がほとんどではないだろうか。動物との接点を自身に見いだせない人びとにとって、動物との関係は没交渉のまま。倫理による禁止と、ビーガン、ベジタリアンのビジネス化が先行してしまっている。〈わたし〉の経験のなかに動物の肉を食べることを据え直す作業がなければ、倫理はただの規制になるのではないか。

本稿では動物の肉を食べることについて、社会や文化、規範といった集団を単位とする枠組みからではなく、〈わたし〉という個の経験から考えたい。現代の日本社会で生活する人びとの食事情は多様であり、文化や民族的背景のみからでは必ずしも説明できなくなっている。ここに、個の経験から食べることを捉え直す意義がある。以下では、イラストレーター・ノンフィクションライターの内澤

句子による『飼い喰い』（岩波書店、2012年）を取り上げる。本書は内澤が三頭の豚を飼育し屠畜²する過程を描いたルポルタージュであり、自らの手で育てた動物を食べるという経験が詳細に記録されている。

農業史研究者の藤原辰史は、培養肉が本格的に市場を占めるようになれば畜産の現場が消失するだろうことを危惧する文章の中で、本書について言及している。藤原は、畜産は家畜を殺すためにケアする営みであるとし、本書はその営みに正面から取り組んだものとして評価している³。本稿では藤原が注目する意味での畜産に加え、内澤独自の豚と向き合う態度について考察していく。また、民俗学者の赤坂憲雄は、内澤が自らの身体が食べたものでできているという事実を、観念的なレベルではなく身体的に捉えていると指摘している⁴。そうした身体性がどのようなものであるのかについて、本稿では内澤の他の著作を検討することを通じて明らかにしたい。

なお、本稿では人間とその他の生き物を区別するもっとも単純な意味で動物という言葉を用いている。

I. 目の前の状況に向き合う態度

本節では『飼い喰い』の中身の検討に入る前に、本書以外の内澤の著書について検討する。

『飼い喰い』は、内澤が千葉県旭市で2008年10月から2009年9月の一年に渡り、自身の手で三頭の豚を飼いその肉を食べた記録であり、内澤と豚たちとの濃密な交流、四者を取り巻く人びとの反応が詳細に描かれている。次節以降で詳しく検討するが、豚と接する際の内澤には、動物と人間の間隔を考えるうえで重要だと考えられる、ある態度が見られる。豚と相対した際に見られる内澤のそうした態度は、『飼い喰い』のみならず各作品に通底する。本節では『飼い喰い』の前後に出版された『身体のいいなり』（2010年）、『捨てる女』（2013年）、『漂うまに島に着き』（2016年）の各エッセイから検討する。なお以下の引用はいずれも文庫版による。

1. 「身体のいいなり」

『身体のいいなり』は「生まれてからずっと、自分が百パーセント元気で健康だと思えたためしかなかった⁵」内澤が、乳癌のホルモン療法の副作用を改善するために始めたヨガを機に、むしろそれまで以上に健康に元気になった体験をつづったエッセイである。

内澤の自身の不調の捉え方は微細である。腰痛、アトピー性皮膚炎、冷え性な

どについて、いつからその症状に苦しめられ、生活にどのような支障が生じていたのかを細かくつづる。それらひとつひとつは大きな病ではなくとも、日常生活に確実に支障の出る不調であり、腰痛やアトピーは化粧品や服飾の選択肢を狭めることにもなる。症状のもたらす障りは、日常生活を送ることさえも億劫にさせる性質のものだが、そうした不調自体は「はっきりした「病気」というわけではないので」仕事を休むこともできない⁶。また休めない背景には、イラストやルポの仕事以外にも装丁デザインや製本とそのワークショップなど、仕事の幅を広げてようやく生活を賄えるだけの収入を得ていたという、ゆとりがあるとは言いがたい経済状況だったこともある。こうした自身の状況を内澤は「貧困に苦しめられているとは公言しにくい⁷」と評価する。しかし、物品の購入をはじめ少しずつ生活の中のさまざまな選択肢を狭めていく要因となり、身動きの自由を奪っていただろう。たとえ、気に入った色のリップがあってもアトピーを気にして使えないという、他人から見れば些細な支障であったとしても、そうした「できない」という経験の積み重ねは確実に心をすり減らし、次の行動や挑戦をさまたげる理由となっただろう。

内澤は、乳癌の発覚を「深い解放感」をもって受け止める⁸。つねに身体のどこかに不調を抱え、ギリギリの経済状況で日々を暮らしていた内澤にとってこの解放感は、現状の生活がひどく苦しいものであることを自覚させるきっかけであり、寿命まで続くかに思われていた生活苦に終わりが見えた瞬間だった。そのため、「この膠着状態を断ち切るものとして歓迎した⁹」のだった。ただ、内澤の思惑からは外れ、数度の手術や治療を通じて、乳癌とは長くつき合うことになっていく。こうして、内澤は自らの身体と、それまでの場当たりの対処療法とは違うかたちで向き合うことになる。その方法のひとつがヨガだった。

内澤はホルモン療法の副作用による身体の急激な火照りや聴覚の不調、人と話すことへの多大なストレスによって、不眠やひどい疲れを覚えるなど調子を損なっていた。そこで、まずは満足な睡眠をとることを目標とし、身体をほぐすためヨガに通い始める。その結果、それまでの不眠が嘘のように眠れるようになる。「身体が身体のしたいようにふるまってくれている¹⁰」感覚を得た内澤は、定期的にヨガのスタジオに通うようになる。

ヨガは内澤が健康になるためのたんなる手段ではなかった。細々とした不調をつねに抱えるままならない身体を引きずって生きてきた内澤が、したいと思ったことを実行できる身体を取り戻す契機だったといえる。それは「身体のいいなり」という、ある種の受動的な感覚をとまなうようなものだった。この受動性は、乳癌以前の不調に振り回されてきたこととは異なる。乳癌以前の身体が、内澤の生活のあらゆる場面での選択肢を狭める方向へ向かわせるものだったとすれば、ヨ

ガ以降の身体は内澤を開放的な能動性へと向かわせる。

また、内澤の自身の身体にたいする考え方は、身体の機能のすべてが健全であらねばならない、というようなものではない。小豆島への移住の経緯をつづった『漂うままに島に着き』では、乳癌キャリアでありながら最新医療を受けられる東京を離れたことについて、次のように書く。

もういいだろうと思ったのだ。いいというのは、快癒しているという意味ではなくて、再発するならしろ、ということである。細かくは割愛するが、今後ちまちまとできるであろう癌を早期発見しては取り除くという作業を、もうしたくない。できたらできたで、別の対応をしながら、癌で死ぬ方策を探そうと思ったのだ。だからこそ、東京をさっくりと離れたとも言える。最新医療とベツリじゃなくてもいいやと思ったのだ。しかし眼はなあ。／我儘だけど、生きている間は仕事をしたい¹¹。

身体をどのような状態で保ちたいかということは、どのような生き方を望むかということに深くかかわっている。乳癌の再発は受け入れるとしても、仕事の都合上健康に保っておく必要のある眼については最新医療を受けたいという願望は、都合のよすぎる「我儘」に思えるかもしれない。しかし、できるかできないかによって選択肢が狭められることは、内澤はいやというほど経験してきた。むしろ可能性の問題を先に立てるのではなく、自身がもっとも望むことを前提に、そこから可能性とすり合わせていくことこそが、「身体のいいなり」になることによって内澤が得た、状況と向き合うときの態度だった。

2. 受動性から能動性へ

「身体のいいなり」は状況に追い詰められ、押し出されるようにして現れた、ある種の受動的な態度だった。ところがこの受動性の行き着く先は、内澤に、ヨガを軸に生活を立て直すという能動的な態度をもたらした。

そこまで内澤を追い立てたものについてもう少し考えたい。つまり、瀬戸際に立たなければ発露しない能動性を招く契機となる受動的な態度とは、内澤にとってどのようなものであるのだろうか。

内澤はセルフネグレクト的ともいえるほど、状況から逃れようとしない。たしかに経済事情や病気は逃れようのないことではあるが、内澤にとっては何らかの出来事に面した際、自身がどのようにその出来事を捉え、いかに感じ行動するかということがより重い問題となるようである。すなわち、振り回された先で突き当たった出来事にたいし、正面から取り組むような態度をとる。そうした態度は、

たとえば以下に引用する『漂うままに島に着き』における、東日本大震災後の東京と小豆島についての記述からも読み取れる。

〔震災後、〕 やっぱり辛いと思いはじめたのは、むしろいつもの日常が戻りはじめてからだった。二年経って賑やかさが戻ってきた東京は、「何事もなかった」体を装いつつ、なんとなくギスギスして映った。室内だけじゃなくて、街全体が息苦しい¹²。

また、島に移住してくる人は以前からいたのであるが、震災後にぐっと増えたのだという。やはり。西日本の各地で聞く話である。東京にいと、震災後に避難した人はいたけれど、それ以降、本格的に移住する人が目立って増えているとは感じられなかった¹³。

日常を取り戻したかのような様相を呈する東京の街は、むしろ内澤にとってつらく感じられるものだった。震災と原発事故という起こってしまった出来事を、「何事もなかった体」であたかも忘れていくかのような社会に、内澤は苦痛を覚える。

東日本大震災と原発事故を機に、食やエネルギー、環境問題に強い関心をもつ人は増えただろうし、従来の生活を見直した人も多いただろう。内澤の場合、できるだけ電力の消費を抑えるために家電製品を使わないよう生活習慣を変えていく。また、震災の直後に店頭からトイレットペーパーがなくなったことに激怒し、トイレットペーパーを使わない方法さえも実行してしまう¹⁴。さらに小豆島に移住したことで、結果的に都市の消費文化から距離を置くことになる。内澤は「何事もなかった体」を装うことを選ばず、出来事¹⁵の起こった後を生きようとしている。

このように、内澤は周囲を取り巻く状況にたいして、自身のなかの納得とつねにすり合わせながら行動を選んでいる。ときとして留保や暫定的な行動を選ぶとしても、そのときの自身が最大限に納得できることを模索しようとしている。それはたとえば、ヨガで「オウム」と唱えることへのためらいからもうかがえる。

それによ一九九五年の宗教テロ、地下鉄サリン事件であれっだけ毛嫌いされた「オウム」という言葉を、なぜ他の人はなんにも思い出さずつまずかずに唱えられるのか。いや、ひょっとして内心いろいろな葛藤があった末で唱えているのか。わからん。私はオウムと唱えるたびにあの宗教弾圧にも似た社会の奇妙なアレルギー反応を思い出してしまっ、とてもじゃないがなんにも

考えずに唱えることなんてできずに口が固まる¹⁶。

内澤は、オウム真理教によるとされる一連の事件を想起することよりも、当時の社会をおおっていた空気を思い出すことが、「オウム」と口にするををさまたげるとしている。ここには一貫して内澤が、社会とその渦中で状況に取り囲まれる個人がどう行動するのかということを自身に問いかける姿勢が見てとれるだろう。

本節では状況と向き合うときの内澤の態度について検討してきた。内澤の態度は、あたかも状況に振り回され流されていくかのように見える。震災や原発事故などは、国や社会を主語に据えて語ることが容易な出来事だが、内澤はそうしない。あくまで個人の〈わたし〉の経験から出来事の輪郭を捉え行動するのである。このような態度は、主語が著者自身となるエッセイという形式によってこそ明示されたと言える。内澤の状況と向き合う態度は結果的に、さまざまな可能性に満ちた無計画性を招くことになるのだが、この点については次節で検討する。

II. 『飼い喰い——三匹の豚とわたし』

本節では内澤句子『飼い喰い——三匹の豚とわたし』¹⁷を、前節で論じた内澤の状況にたいする態度に着目して読んでいく。

本書以前にも、内澤は国内外の屠畜現場を取材した経験をもつため屠畜には詳しい¹⁸一方で、屠畜場に送られる以前の家畜については知らないことが多かった。畜産農家に取材したが、そもそもの家畜の生態、生育過程について知らないことが多く、農家の説明を聞いても要領を得ないため、自ら豚を育て知っていくことにしたのだった。しかしその過程は想定外のことに振り回されてばかりとなった。内澤は進んで豚に翻弄されていく。

以下では、『飼い喰い』の内容に沿って、三頭の豚と関わる内澤の態度や姿勢について考察していく。

1. 食べるために飼い育てる

フィクション、ノンフィクションを問わず食を主題とした文学作品は過去も現在も多い。新しく書き下ろされる一方、著名な文筆家の食にまつわるエッセイを集めたアンソロジーが編まれるなど、こうした出版状況は一般社会の食への高い関心を少なからず反映しているものといえるだろう。美食や珍味を消費することへの尽きない興味は、膨大に出版されている雑誌やレシピ本からもうかがい知れる一方で、それらが食べものとなる前の生きた動物の姿を喚起することはあまり

ない。

消費するのみに留まらず、食べものが生物から作られていることを踏まえたものとして、たとえばエッセイストの平松洋子による『肉とすっぽん』が挙げられる。本書は羊や猪、鹿などの肉を使った料理を取り上げるが、調理と実食のみならず、それら生きた動物の飼育や狩猟の現場を取材し、動物が肉になる過程を追っている。本書は肉食が必須ではない時代や社会において、それでも肉を食べるといふ行為が人間にとってどのような意味を持つのかを問いかけるものとなっている。近年の動物の権利・福祉の議論と異なる立場をとることからもわかる通り、本書では肉にするために動物にたいして振るわれる暴力自体は問題とされない。言い換えれば、動物の肉を食べることを揺るぎない前提とした場合には、暴力の問題は肉質の良し悪しへとすり替わってしまう。あるいは害獣の駆除においても同様のことが言えるだろう。熊や猪などが人間や居住地に危険を及ぼす害獣とみなされるとき、その駆除すなわち殺すことは地域住民の安全を守るために必要なこととされる。動物への暴力の問題は人間の安全の問題へと差し替えられたまま、問われることは稀である。

人間と動物との関係にはつねに暴力が介在している。濱野ちひろ『聖なるズー』は、動物性愛者へのインタビューを重ねたノンフィクション作品であり、人間と動物との関係をセクシュアリティから捉える。殺すことや劣悪な環境下での苦痛を伴う肥育などが畜産における動物への暴力だとすれば、動物性愛においては意思の確認を取ることができない動物を、ときに性行為を伴うパートナーとすることが問題となる。本書で登場する動物性愛者（「ズー」）たちは、パートナーである動物たちとの関係が支配—被支配という暴力的な関係に陥らない方法を模索しているが、著者は暴力が愛という言葉によって覆い隠される危険性を注意深く捉えている。

愛情をもって動物の世話をするという点では、ペットの愛好家も畜産農家も変わらない。愛情の有無にかかわらず、動物と人間との関係において暴力は抜きがたいものとして存在する。『飼い喰い』は、動物を愛玩用や食用などに分ける恣意的な境界線を引くまさにその瞬間に著者自身を置き、そうした境界線をむき出しにする。

内澤による境界線の攪乱行為は、たとえば豚の名づけにも見られる。内澤は飼育する豚を三頭にする理由について次のように述べる。

おそらく私は豚を一人で育てることになる。一頭だけを飼うとなると、一对一の濃密な関係になってしまう。犬を飼った経験では、動物は一頭だけであると、自分が人間だと思ってしまう¹⁹。

これから飼う豚は人間のように扱うことをせず、豚とのあいだに明確に線を引き、家畜として飼おうという意気込みを感じさせる。しかしその一方で内澤は、三頭の豚それぞれを、伸二（伸、中ヨーク²⁰、雄）、夢明（夢、三元豚／LWD²¹、雄）、秀明（秀、デュロック²²、雌）と名づけた。

彼の名前は伸だ。もう決めてあった。実は去勢雄を三頭飼うと決めた時点で、顔を合わせた男性、近所の古書店主から打ち合わせで会う編集者まで、とにかく片っ端から名前を提供しませんかと声を掛けまくっていった。／「なんで俺の名前を豚に貸さなきゃいけないんだよ」にやりと笑いながら傲然と言いつつ放ったのは、長らく屠畜場に勤務して牛を捌いてきた末に小説家となった佐川光晴さんだった。さすが人と家畜の境界線をきちんとお持ちである。こんなに面白い返しをしたのは彼だけで、去勢した上に食べると説明すると、ほとんどの男性は恐怖に顔をゆがめ、絶句するか下を向いて「ムリッす」と小さくつぶやくのであった。／そんな中で、まったく動じずにどうぞと言った方、順番に伸二、夢明、秀明、の名前をお借りすることにしたのだった。ただ、飼って実際に呼んでみるとユメアキ、ヒデアキは、実に呼びにくいので、夢ちゃん、秀ちゃんと短くして呼ぶこととなった。伸二は比較的呼びやすかったので、そのまま呼んだり伸ちゃんと呼ぶこととなる²³。

内澤は新しく名前を作ったり豚を連想させやすい名前をつけたりするのではなく、豚の雄に実在の人間の男性の名前を、というように対照させて名前をつけた。引用箇所では男性たちの反応も興味深い。確かに、最終的に食べることになる豚につける名前を身近な人たちからもらうというのは、一見ただの悪趣味にも感じられる。しかし豚に人物の名前をつけることによって、家畜と人間の曖昧な境界線が浮かび上がる。名前の提供を請われた男性たちは明らかに豚と自らを、それぞれの生涯すらも重ねている。ひとり佐川光晴は自身の名前を手放さない。「貸す」という言葉は、名前の持ち主は佐川であることを示し、豚と自身をまったく別の存在として認識していなければ出てこない言葉だ。

なぜ豚に名前をつけたのか。内澤は「今多くの人が厳然と信じているペットと家畜の境界を、私はあえて曖昧にしてみたい。名を呼んで、その動物に固有のキャラクターを認めて、コミュニケーションしたうえで、殺して食べてみたかった²⁴」と述べる。

周りの反応を聞けば聞くほど、結局は何がかわいそうで何がかわいそうでないか、何を食べて何を食べないかという基準のもとになるものが、わからない

くなる。結構いい加減な、単なる習慣に基づいているだけにすぎないのではと思わされる。なのにほとんどの人は、それを絶対的な確固たるものだと思いついでいる。時にはタブーであるかのように、騒ぐ。実に不思議だ。そうとなれば、意地でも壊してやろうじゃないか、という気持ちがむくむくと湧いてくる。／しかしそんな問題は抜きにしても、毎日豚の世話をしていれば、いや飼ったその日から、ほんとうに豚がかわいくてしかたがなかった。家畜だからとか、ペットのようにとか、思うより前に、愛情は湧いてきてしまい、もっともっと彼らと触れ合いたくなり、それを止めることはどんどん難しくなっていく²⁵。

内澤は豚に名前をつけるという行為によって、豚と人間のあいだ、ペットと家畜のあいだに前提されている境界線の曖昧さと、それを無条件に受け入れている人びとの姿を明らかにした。だが、事前にどのような思惑を持っていても、実際に豚と相対してしまえばたちまち吹き飛んでしまう。畜産農家から豚をもらい受ける際には、個体としてよりも種としての豚に関心の重きが置かれていた内澤だったが、飼育を続けていくうちに伸、夢、秀の豚それぞれの固有の姿や過ごし方などの特徴を捉えていくのだった。

内澤は豚を飼うと決めたときから最後には食べようと考えていた。とはいえ、飼育の過程で心境が変化することも想定していた。

第一自分が来年手塩にかけた豚をほんとうに出荷できるのかどうか、一〇〇パーセントの自信があるわけではない。その時になってみないとわからない。だからこそやってみたいのであるが²⁶。

後述するが、内澤は食べるつもりで飼育を始め、飼育する日々のなかでも豚を食べる覚悟を決めていった。逆にある瞬間には、この豚を食べないでおこうか、と迷うこともあった。その瞬間ごとに、食べることについて何度も思い直し、食べよう決めてきた。内澤にとって家畜を食べることは当然のことであり、最初から豚を食べることはあらかじめ据えられたゴールだったのは間違いない²⁷が、そこへ向かう過程は必ずしも直線的・単線的なものではなかった。

2. 三頭の豚と内澤の関係

内澤による豚の飼育の特徴的な点のひとつは、豚を飼うこと以外の算段は後から整えるという見切り発車で始めていることである。旭市はどこでも豚が飼えると聞いていた内澤だったが、実際に物件を探し始めると糞尿の臭いと啼き声を理

由に周辺住民からの反対にあい、住居及び飼育場所の選定は難航した。かつて旭市は庭先で豚を飼う農家も一般的だったと言われるが、現代ではほとんど専門の畜産農家に譲っている。逆に言えば勢いがなければ乗り越えられないほど、個人的に豚を飼うことには困難がつきまとう。東京に住まいがあり、車の運転に不安がある内澤にとっては、さらに細々と解決しなければならない問題が山積していた。

最終的に内澤は、バイパス道路から1キロ離れた旧国道沿い、元は居酒屋で粗大ごみが大量に捨て置かれたままのほとんど廃屋を借りることで、豚の飼育にこぎつける。人手を頼みながら、敷地内に豚小屋と運動場を整えた。

こうした無計画性²⁸について、『身体のいいなり』のなかでも言及している。

そして思い返せば自分の人生の重大な転換点はすべて、なぜか頭で考えようがない、降ってわいたような計算外の、無秩序と偶然と感覚に突き動かされてやってきたものなのだった²⁹。

内澤自身の身の振り方と豚を飼う周辺環境、それらすべての条件をあらかじめかみ合わせることはほとんど不可能だっただろう。計画を立てることが不可能であるという無秩序こそが、内澤に養豚を始めさせる契機でもあった。

内澤が飼ったのは三種類の豚である。飼育はすべてひとりで行うことからあまり多数を飼うことはできず、また病気によって途中で死んでしまう恐れから一頭のみでは心もとない、といった理由によって三頭に決まった。内澤は性別を雄で統一しようとしたが、豚を提供してもらった都合上、一頭のみが雌になった。

三頭の豚を迎えたその日から、内澤と豚との関係性は濃く密になっていく。初日の夜、ボスを決めるためにか秀と夢が仲に噛みつくなどして攻撃しているところを目撃した内澤は、思わず声を上げる。

「やめなさいっ」／静観するつもりだったけれども、思わず怒鳴った。ぴたりと止まり、ふっと三頭がこちらを振り返り見上げる。ナニ寝言言ッテンダコイツ、と言わんばかりな夢は、昼間のしょぼしょぼな顔とはまるで別豚。意地の悪そうなヤンキーの目つきである。秀も凶悪な顔をしている³⁰。

内澤は三頭それぞれとの関係を築いていく³¹。とくに、初日に豚小屋に入ることを激しく拒んだ夢との関係はとりわけ濃く、「果たし合いのようなつきあい」となる。

夢は内澤の元に来たとき、前足の関節部分が腫れているように見えた。幸い健

康に育ったが、当初は病気が懸念され、元いた農家で別の豚と交換することを協力者たちから提案された。しかし内澤は交換を望まない。

やっぱりこのまま飼おう。もう情も移ってるし。実際その後大きくなるうちに、夢の両前脚のふくらみは綺麗に消えた。ほんとうによかった。飼い始めて半月も経たないけれど、もう子どもの発育を心配する母親になった気分だった³²。

内澤の「母親」的振る舞いは、伸が餌を食べるのを邪魔する夢を「躰」として叱る場面にもうかがえる³³。このときは跳ね飛ばされ、「躰」の効果は見られなかった。その後、夢は掃除で小屋に入ってくる内澤に後ろから押し掛かるマウンティングをするようになる。

「何やってんの、夢！」と言うと、「ゴッ」とふてぶてしい答えが返って来る。そう、あまりにも叱られる回数が多いためなのか、夢は、自分の名前まで認識していた。三頭とも私の声と他の人の声を完全に聞きわけていたが、名前まで把握していたのは夢だけだった³⁴。

内澤と夢の関係は、文字通り体を張った、ときに荒々しいものでもあった。ある晩、豚小屋を掃除していた内澤は、外に糞を捨てに行く。そのとき金具がはまりきっていなかったため鍵が開いてしまい、伸と夢が小屋の外に出てしまう。伸はすぐにどうにか小屋に押し戻せたが、夢は家の敷地を歩き回り、小屋に戻るそぶりも見せない。内澤は夢の「背中からかぶさって肩から前脚を抱」き、「頭が真っ白になったまま、何か怒鳴りながら片手で扉を開けて、もう片方の手と足で騒ぐ二頭に夢を押し付けるようにして叩き込み、扉を閉め、鍵をかけて地面にへたり込んだ³⁵」。しばらくしてから小屋の中の様子をうかがった内澤は、「腰が抜けたように後ろ脚を折り曲げ、前脚で立って、頭を下げ、目を伏せてぶるぶると震えている」夢を見つけ、まるで呆然としているかのようなその姿に「私だってショックだ」とつぶる³⁶。

翌日からしばらく夢は私に寄ってこなくなった。撫でようとしても避けられる。マウンティングもしない。それはそれで寂しかったが、しかたがない。どんなに対等に付き合おうとしても、結局は私がこの豚たちを管理しなければならない。公道に迷い出せば、近隣住民に多大なる迷惑をかけてしまう。それが動物を飼うということだ³⁷。

ここでは、豚の名づけ以上に強固で明確な境界線が、豚と人間との間に引かれていることに気づくだろう。内澤がそれぞれの豚との間にまるで人間関係のような濃密で個別具体的な関係性を築こうと試みても、そうした関係性は理解されるものではなく、内澤はあくまで家畜の飼育・管理の責任者にすぎない。そのもどかしさがにじみ出ているような文章だ。

一時的に内澤を避けているようだった夢だが、そのうちに再び「兇暴にじゃれつく」ようになる。しかし内澤によると、夢は闇雲に内澤たちを振り回すのではなく、相手をよく見ているのだという。

しかし夢はただ兇暴というわけでもなく、何というか、あの脱走の日を境により一層私を「みる」ようになった。／七月のある日、私は自分の乳癌の治療のことで病院と大喧嘩して、東京から泣きっぱなしで帰宅した。涙が止まらないまま、掃除のために小屋に入った瞬間から、夢はどういうわけか挑むように襲いかかってきた。私は拳で、夢は鼻で、わあわあぎーぎー叫びながら、わけもなく殴り合った。痣ができるまで噛まれたが、何だかとてもすっきりした。／思い込みかもしれないけれど、あの時は夢に助けてもらったように思える。あれもアニマルセラピーと呼ぶのだろうか。／夢とはその後もずっと最期まで、ペットでも家畜でもない、果たし合いのようなつきあいが続いていく³⁸。

人をよく見るという夢は、内澤に協力する農家からも「あのLWDは人を見るからな。何だか気味が悪いっぺ……」と言われる。いよいよ屠畜日が決まると、まるでそのことを知ったかのように、夢だけが水も餌も口にしなくなった。丸一日の絶食の後、夢はようやく水を飲む³⁹。その夜、内澤は道路標識に激突する事故を起こし、乗っていた車は大きく損壊した。内澤の友人たちはこの出来事を「豚の呪い」と呼んだという。

次に伸との関係である。三頭のなかではもっとも身体が大きく、ボスになるかと思われていた伸だったが、実際には初日の顔合わせで夢と秀にやりこめられることになった。その後も、二つだけの給餌器から他の二頭よりさきに食べることはまずなく、内澤が手ずから野菜やおやつを与える際にも、しばしば夢に押しのけられていた。このため、飼育期間の最終盤に肥育の追い込みをかけた際には、伸がより多く餌を口にできるよう、夢・秀とは別の方法を考える必要があった。

気を抜くと引き倒されたり押し掛かれたりすることばかりだった夢とはまた違った意味で、伸は内澤にとって手のかかる家畜だった。それは、目をかけていないと餌を食いつぶぐれることや、しばしば夢のいじめから遠ざけてやったこと

など、とりわけ庇護した経験からもうかがえる。また、伸の特徴は夢、秀以上の懐こさにあった。

三頭の飼育を始めた当初の頃、内澤は豚小屋に入り伸と視線を合わせると「甘すぎる誘惑」に駆られた。

それは、甘すぎる誘惑だった。しゃがんで伸と見つめあった瞬間、伸の表情が変わったのだ。急に表情豊かになって、好奇心いっぱい目を輝かせてこちらに寄って来る。ああ、やっぱりこっちが立って見下ろしている状態は、あんまり好きじゃないんだなあ、君たちは。よしよしおいで。伸は匂いを嗅ぐように、私の隣までやって来た。頭を撫でてみる。伸は目を細めて受け口のおごを上げる。／餌をやる行為から、さらに一段、豚に近づいてしまった。どうしよう。でも、なんてかわいくて面白いのだろう。犬よりも表情が豊かなんじゃないだろうか⁴⁰。

以降、伸は「長靴を甘噛みするだけでなく、鼻を顔に押し付けてきたり、腿にすり寄って膝枕のように頭を預けて寝そべったり」、「お腹を撫でてやると気持良さそうに笑う」といったように、内澤に甘える仕草を示すようになった。内澤と伸の接触は、やがて伸の性器をさするところにまで行きつく。

ある晩そろそろと窓をあけて小屋を見たら、秀が伸の性器を鼻でふんふんふんふんっと、荒々しくいじくっていたのだ。／目を疑った。いじめているのかと思ったが、伸は気持良さそうにお腹を出して、どう見ても「やってもらっている」という風情だった。秀は私の視線に気づくとぱっとやめてしまった。それでも伸はそのままもっとやってほしそうにお腹を出して寝そべっている。

〔中略〕

いろいろ考えたが、わからない。わからないなりに、自分で試してみたいという気持ちが、むくむくと持ち上がって来た。豚を擬人化しているつもりはない。豚として触ってみたい。しかしそれは、人と動物の境界をある意味踏み越える行為になりはしないか。／生憎この家には豚と私しかいないので、止める人もいない。人にも会わずに、原稿を書きながら、豚ばかり見て暮らしているのだから、どんどん境界が曖昧になっていく⁴¹。

こうして内澤は「伸が嫌がるならば、やめればいい」と、小屋に入って伸が横に寝そべるとき、性器を撫でるようになった。いつもというわけではなく、伸の

気が向かないときは「すっと立ち上がってしまう」。

内澤は、夢とは「喰うか喰われるかの気合いとともにいつも相對してきた」のにたいし、三頭のなかでもっとも人間に近い表情を見せる伸については、それゆえ「これをいずれ食べるのか、と毎日意識するようにしていた⁴²」と述べる。

内澤と夢、伸との身体的な接触は、一般的な養豚業における豚の扱いからおよそ外れている。しかし、生き物を相手にしている限り、つねに最低限の接触だけで済むとは限らない⁴³。人間がそうするように豚もまた動き回る。夢の脱走はその象徴的な出来事でもあった。当然のように予測不可能な行動をする豚たちを強制的に抑制するのではなく、その動きにできる限りつきあうのが内澤の飼い方だった。つき合った結果、予測できない行動を起こすのは内澤自身も同様であり、体を張った豚との接触の中で豚たちとの境界線を探っていくのだった。

他の二頭と異なり、秀はやってきた頃からほぼ一貫して、「人間に無関心」で「ただひたすらもくもくと食べて寝てを繰り返」し、「やってきたお客さんも、表情が乏しく、丸々と太って寝てばかりいる秀に「うまそう」と声をかける人が圧倒的に多かった⁴⁴」。秀は夢のように内澤にぶつかっていくことも、伸のように懐こい仕草を見せることもなかったのである。

ところが、屠畜まで残すところ一ヵ月を切った頃から、秀は内澤にたいし甘えるような仕草を見せ、表情が表れるようになり、それまで合わなかった目線も内澤を捉えるようになった。このような秀の変化を目の当たりにした内澤は、秀にかんして「喰う」という決意が揺らぎだす。

〔伸と夢は去勢だからいずれ肉にするしかないため〕 どれだけかわいくても、ペットにしてしまおうという気はなかった。それは、違う気がしていた。何の根拠もないけれど。

〔中略〕

でも秀は雌なのだ。あと二か月もすれば、秀は出産可能な身体になる。そうしたら精子を買ってきて、人工授精すれば、出産できるのだ。考えはじめたら、どんどん秀に出産を経験させてあげたくなってきた。いや、違う。自分が秀の出産を見たいのか。もうどっちがどうだかわからなくなってきたけど、見たいし体験したい。子豚たちも育ててみたい。そう思いだしたら止まらなくなった⁴⁵。

妊娠・出産を「経験させてあげたい」という言葉は、秀の意思を確認することが叶わない以上、内澤の「見たい」という欲望とほとんど同意である。そのことを内澤自身もわかっていながらあえて「経験させてあげたい」という気持ちを書

き留めていることで、家畜の管理者としての内澤の立場が想起される。そして、夢の妊娠出産を見届けたいという思いに引きずられるように、豚を飼いつけたいという、管理者の立場から逸脱するかのような思いが噴き出してくるのだった。

〔三頭とこれまで培ってきた関係性が〕屠畜の日を境に、ぷつりと切れてしまうのが、とても惜しかった。その先の想像がつかないと言い換えてもよい。これまで私と三頭が交わしていたものが、どこに消えてしまうのかが、皆目見当がつかなかった。消えたら消えたでいいような気もするし、とても寂しい気もする。／ペットではない。まして家族や友人でもない。彼らは家畜だ。かなりペットに近い形で飼ったかもしれないけれど、家畜だ。でも、確かに愛情を交わし積み重ねてきたのだ。／豚を食べるために殺すのに躊躇はないけれど、豚をずっと飼いつけていたい⁴⁶。

ここに至って内澤は、豚を肉としてではなく自身との関係性から捉えるようになっていた。とはいえ異なる種であること、家畜であること、食肉用であることといった、豚に向ける眼差しにかけられたフィルターが外されたわけではない。しかし、これから食べるのはおいしい肉やたんなる生きものではなく、内澤にとって固有の関係を結んだ相手なのだということが認識されているのである。

3. 夢と伸と秀を喰う

豚を飼いつけたいと願う傍ら、内澤は肉を喰うという目的から外れることなく着々と三頭の肉でフランス料理、タイ料理、韓国料理それぞれの料理人を頼み、食事会を開くことを計画していく。当初は三頭すべてを料理してしまうことを考えていたが、最終的に食事会では一頭だけ丸々食べ、あとは1キロずつ塊肉にして販売するよう計画を変更した。どの豚を丸々食べるか。問われた内澤は「それは……、夢ですかね」と答える。

どれか一頭を選べと言われれば、やっぱり夢が印象的なのだ。脱走した時に取っ組みあったし、何よりこの豚の、底意地の悪く頭のいい感じが、「喰べてやる」という気にさせるではないか。よし、夢を料理に回そう⁴⁷。

その夢だが、いよいよ屠畜という日、屠畜場に移送する直前になってトラックに乗らず敷地内を逃げ回る。それを見た内澤は複雑な心境の変化を経験する。

「そうだよねえ、夢ちゃん、もうあたしとここで一緒に住んじゃおうか」／

そんなことは、ほんとうに、今の今まで思ったことはなかったのだ。けれども、嫌がる夢を見ていたら、みんなに笑われてもいいから、夢をペットとして飼ってもいいんじゃないかと思えてきた。／床をご機嫌に嗅ぎまわっていた夢がハッと顔を上げて私を見つめる。夢は、戸惑っていた。そう見えた。／「え、そんなつもりでごねたんじゃないんだけど……」と言っているように、思えた。／ピーッピーッ。／トラックがバックする音が響いた。方向転換して、家の玄関につけているのだ。引き戸のガラス越しに青い車体が見え、私は正気に戻った。／やっぱり、おまえを、喰べよう⁴⁸。

こうして内澤はキャベツで夢の気を引きながら、屠畜場へ運ぶトラックの荷台に夢を上がらせたのだった。

その後は千葉県食肉公社で三頭の屠畜をつぶさに観察する。ベルトコンベアに載せられた豚たちはトンネルをくぐりぬけた先で、スタンナーで意識を失い、直後に作業員のナイフで喉を切られる。豚が出てくるトンネルの先で待ち構えていた内澤は、秀が出てきたときに目が合った気がして感傷を覚えるものの、三頭の死を静かに受け入れる。洗浄を終えこれから解体に送る三頭の顔を前に内澤は、「どこで、と問われれば、この瞬間に、三頭と別れたのだろう。すぐに二階で、てんやわんやの解体作業がはじまるのはわかっているものの、この一〇秒か二〇秒くらいの間、三頭の「死体」と私だけ、機械音はするけれどちょっと静かな時間を持てたことは、とてもよかったように思う⁴⁹」。そしてすぐに解体の現場に向かうのだった。

食事は予想以上の大盛況で、結果的に料理は足りないくらいだったという。内澤は三頭から作られたローススライスを口にします。

いささか緊張しながら、タレをつけて柚子を絞りばくりと口に運んだ。／噛みしめた瞬間、肉汁と脂が口腔に広がる。驚くほど軽くて甘い脂の味が、口から身体全体に伝わったその時、私の中に、胸に鼻をすりつけて甘えてきた三頭が現れた。彼らと戯れた時の、甘やかな気持がそのまま身体の中に沁み広がる。／帰って来てくれた。／夢も秀も伸も、殺して肉にして、それでこの世からいなくなったのではない。私のところに戻って来てくれた。今、三頭は私の中にちゃんという。これからもずっと一緒だ。たとえ肉が消化されて排便しようが、私が死ぬまで私の中にずっと一緒にいてくれる。／こんな奇妙な感覚に襲われるとは、私自身、ほんとうに思いもしなかった⁵⁰。

ペットではないからかわいがってはいけない、でもかわいくないわけではない

と葛藤する内澤は、「畜産は、そんな単純なものではない。自分がやってみて思ったのは、生き物を育てていれば、愛情は自然に湧く、ということだ⁵¹」と悟る。

少なくとも私は、食べる肉の量を減らすことはできても、肉食を完全にやめることはできない。家畜を飼い育てたり、野生の動物を捕えるところから、屠って切り開き口に入れ、嘔みしめ飲み下すまでの、喜びと悲しみとが混ざり合った、形容しがたい激情、矛盾、快樂。それらのすべてを失うのは、あまりにも悲しい。肉のもたらす「豊かさ」を大事にして生きていきたいと願っている⁵²。

この「豊かさ」という象徴的な言葉は、内澤の経験から捉え返されるべきだろう。内澤が三頭の肉を口にしたとき、その胸に去来したのは自身が経てきた三頭がいるあの旭市の廃屋での生活の風景だった。それは歴史や文化といった普遍的な言葉だけでは語ることはできない、具体的な個人の経験である。もちろん、内澤が旭市で豚を飼うことができたのは、そこに養豚の歴史があったからだ。とはいえ本節で見てきたように、内澤の豚との関係の築き方や関わり方は、誰もが真似できることではなく、むしろ一般化を拒む。

また内澤にとって豚がいた生活とは、給餌や掃除、遊びといったような豚との直接のふれあいを伴うことのみを指すものではないだろう。豚を飼うための家を探したことや、豚小屋のメンテナンス、「豚の呪い」と言われた事故などの経験もまた、三頭の肉を味わい深くさせるものとなったはずだ。内澤は肉を喰うことで、三頭それぞれと築いた関係性を身体に取り込んだのだ。

おわりに

本稿では内澤句子『飼い喰い』から、肉を食べるときの〈わたし〉というものについて考えてきた。

動物の置かれている状況は、種によっては一刻の猶予もないほどの深刻な暴力にさらされていることも事実である。毎分、毎秒、尽きない食肉需要によって殺されていく家畜がいる。そうした現状を憂慮する立場からすれば、本稿の議論がひどく悠長で呑気に過ぎるように思われるだろう。

しかし、ただ動物性食品を食べないという選択をするだけでは、思考なき肉食と同じことを反復する危険があるのではないだろうか。ビーガンズムが敷く「規範が働く場の手前⁵³」に、動物の肉を食べることについての思考を確保することこそが、食に関するさまざまな価値観が交錯する現代においては重要なのではない

か。動物を殺す、肉を食べるというその時点のみに生きているわけではなく、私たちはさまざまな状況にからめとられながら食べものを口にしている。肉を食べるために動物を殺していることは間違えようのない事実だが、それだけに留まらない無限に繊細なニュアンス⁵⁴の関係性を結ぶことが可能であること、すなわちそれは動物と人間との関係のなかに〈わたし〉を取り戻す営みであるということ、『飼い喰い』は示している。

注

- 1 井上太一『今日からはじめるビーガン生活』亜紀書房（2023）80.
- 2 「屠畜」あるいは「処理」といった言葉は、動物を人間が殺害する事実を見えづらくさせるとして動物倫理の観点から批判されることもある。しかし、屠畜という一連の工程は殺すという一点のみに集約されるものではないとの考えから、本稿では内澤の使用に沿って「屠畜」を用いる。
- 3 藤原辰史「培養肉についての考察」『現代思想』2022vol.50-7 青土社（2022）145 - 150.
- 4 赤坂憲雄『奴隷と家畜——物語を食べる』青土社（2023）350.
- 5 内澤句子『身体のいいなり』朝日文庫（2013）5.
- 6 『身体のいいなり』53.
- 7 Ibid.53.
- 8 Ibid.49.
- 9 Ibid.54.
- 10 Ibid.101.
- 11 内澤句子『漂うままに島に着き』朝日文庫（2019）254.
- 12 Ibid.22.
- 13 Ibid.68.
- 14 内澤句子『捨てる女』朝日文庫（2017）125.
- 15 ここで用いている「出来事」という言葉には、たんに年表上の事実としてではなく、それを経験したり見聞きしたりした者一人ひとりにとって傷にも似た何らかの影響をもたらすものという意味を込めている。岡真理『記憶／物語』岩波書店、2000年、vii—xvi.
- 16 内澤『身体のいいなり』110
- 17 『世界』（岩波書店）で連載されたのち、単行本が岩波書店より2012年に発行された。本稿での引用はすべて角川文庫版（2021）による。
- 18 その成果は、内澤句子『世界屠畜紀行 THE WORLD'S SLAUGHTERHOUSE TOUR』（解放出版社、2007年）として出版されている。
- 19 内澤句子『飼い喰い——三匹の豚とわたし』角川文庫（2021）22.
- 20 中ヨークシャー。白色で中型。
- 21 ランドレース、大ヨーク、デュロックを掛け合わせた雑種。
- 22 褐色で大型寄り。しばしば掛け合わせに用いられる。
- 23 内澤『飼い喰い』65.
- 24 Ibid.154.
- 25 Ibid.157 - 158.
- 26 Ibid.39.
- 27 内澤は、育てた豚を食べないでほしいと母親から懇願されるものの、豚の飼育のために協力を仰いだ人がたくさんいるので「こんなにいろいろな方に協力していただいているのに、いまだ食べないなんて思うわけがない」（『飼い喰い』236）と述べる。内澤の場合、豚を食べることは個人の思惑のみで決まったわけではなかった。

- 28 興味深いことに、内澤の無計画性や、追い詰められた状況に際しての受動性から能動性への転化は、栗原康によるアナキズムの説明と似ている。栗原康『アナキズム』岩波新書(2018)。
- 29 内澤『身体のいいなり』108.
- 30 内澤『飼い喰い』129.
- 31 内澤が三頭の豚との関係を築いていくにあたって、獣医の早川結子氏の存在も大きく影響したと考えられる。早川氏は、庭に生えている葛などの草を手ずから豚に与えてみせた。このことをきっかけに、内澤は飼料のみで育てる方針を転換し、バナナやキャベツなどの野菜を手ずから与えるようになったという。給餌器で自動的に与える飼料と異なり、野菜くずなどは手から与えるので物理的距離も縮まる。
- 32 内澤『飼い喰い』138.
- 33 Ibid,146.
- 34 Ibid,186.
- 35 Ibid,161 - 162.
- 36 Ibid,162.
- 37 Ibid,162 - 163.
- 38 Ibid,166 - 167.
- 39 Ibid,194.
- 40 Ibid,147 - 148.
- 41 Ibid,148 - 149.
- 42 Ibid,224.
- 43 沖縄の養豚業について、複数の養豚業者でフィールドワークを行った比嘉理麻は、大規模な養豚場では豚と人との接触が少なく済むよう施設や作業が設計されていることを指摘している。比嘉理麻『沖縄の人とブタ——産業社会における人と動物の民族誌』京都大学学術出版会(2015)。
- 44 内澤『飼い喰い』224.
- 45 Ibid,226.
- 46 Ibid,227.
- 47 Ibid,192.
- 48 Ibid,241 - 242.
- 49 Ibid,258.
- 50 Ibid,300 - 301.
- 51 Ibid,190.
- 52 Ibid,268.
- 53 雑賀恵子『空腹について』青土社(2008) 171.
- 54 星野太『食客論』講談社(2023) 141.

参考文献

- 赤坂憲雄『奴隷と家畜——物語を食べる』青土社、2023年。
- 秋津元輝、佐藤洋一郎、竹之内裕文編著『食と農の新しい倫理』昭和堂、2018年。
- 井上太一『動物倫理の最前線——批判的動物研究とは何か』人文書院、2022年。
- 井上太一『今日からはじめるビーガン生活』亜紀書房、2023年。
- 内澤句子『世界屠畜紀行——THE WORLD'S SLAUGHTERHOUSE TOUR』角川文庫、2011年。
- 内澤句子『身体のいいなり』朝日文庫、2013年。
- 内澤句子『捨てる女』朝日文庫、2017年。
- 内澤句子『漂うままに島に着き』朝日文庫、2019年。
- 内澤句子『飼い喰い——三匹の豚とわたし』角川文庫、2021年。

- 内澤旬子『カヨと私』本の雑誌社、2022年。
岡真理『記憶／物語』岩波書店、2000年。
栗原康『アナキズム——丸となってバラバラに生きろ』岩波新書、2018年。
雑賀恵子『空腹について』青土社、2008年。
野林厚志編著『肉食行為の研究』平凡社、2018年。
濱野ちひろ『聖なるズー』集英社文庫、2021年。
比嘉理麻『沖縄の人とブタ——産業社会における人と動物の民族誌』京都大学学術出版会、
2015年。
平松洋子『肉とすっぽん——日本ソウルミート紀行』文春文庫、2023年。
藤原辰史「培養肉についての考察」『現代思想』2022vol.50-7 青土社、2022年。
星野太『食客論』講談社、2023年。

Abstract

I Eat Animal Meat: The Relationship between Animals and Humans in Uchizawa Junko's "*Kaigui*"

Ayuki NAITŌ

This paper considers the relationship between animals and humans from the perspective of meat eating. In recent years, there has been a strong interest in eating meat, as evidenced by the increase in the variety and number of soybean meats sold. The increasing number of meat-alternative food options is indicative of the growing interest in meat-eating. Industrial livestock production, which provides meat, has many problems from an environmental protection perspective, including large emissions of carbon dioxide and methane gas and water pollution. They threaten human food safety and are a danger to livestock. Therefore, it has been criticized from the perspective of animal rights and animal welfare. In recent years, discussions on animal ethics have been increasing in Japan as well. The question of this article is: Does veganism discuss meat eating? This article examines ways to think about the relationship between animals and humans from personal experience through illustrator and non-fiction writer Uchizawa Junko's book "*Kaigui*". "*Kaigui*" is a record of Uchizawa raising three pigs with his own hands and eating their meat over a year from October 2008 to September 2009 in Asahi City, Chiba. This book details the close interactions between Uchizawa and the pigs, as well as the reactions of the people surrounding them.

In the first section, examine Uchisawa's works. Uchizawa has acquired the attitude to face things by pushing her confidence into desperate situations. Uchizawa's attitude seems as if her is being swayed by the situation. Uchizawa perceives events from personal experience and acts accordingly.

In the second section, I examine "*Kaigui*" in detail. Uchizawa cultivated relationships with each of the three pigs, and eventually ate them. When Uchizawa tasted the meat of the three animals, what flashed through her mind was the life he had experienced in the abandoned house in Asahi City where

the three animals lived. By eating the meat, Uchizawa incorporated into her body the relationships she had built with each of the three animals. We do not live only at the moment of killing animals and eating meat; we eat food while being intertwined with various circumstances. When thinking about meat eating, it is necessary to bring the individual back into the relationship between animals and humans.

